

PEOPLE

羽山 旭太
農業指導者

Let's meet up!

写真&文・若木信吾

限界集落の
未来と可能性を
見つめる若い瞳。

その夜の太鼓の拍子と歌だけの盆踊りはとても力強かった。2010年8月14日にここ池谷集落を尋ねたのは、去年30年ぶりに復活した盆踊りを見るためだった。新潟県中越地震のとき、新潟県十日町市の山間部にある、棚田で農業を営むこの集落にも大きな被害があった。震災から5年、毎年の田植えや稲刈りにはボランティアの人たちも駆けつけ、元気を取り戻しつつある集落にさらに勢いをつけようと始められたのが盆踊りだ。

土地というものには何かしら強い磁力がある。多くの人々は自分たちが住む場所を離れようとしな。遊牧民でない我々日本人は定住することを好み、代々その土地を子孫に残していきたいと思っっている。都会ではそれがままならないことも多いが、この集落では別の理由で、代々培ってきた土地が失われつつある。池谷集落は7世帯16人しか住民がいらない。その他の住民は震災後、崩れた家や田畑を残したまま、別の場所に移住していった。残された住民の平均年齢は70歳近くで、彼らの代で終わってしまう可能性は高い。

その村のことはJENというNGO法人の事務局長の方の取材で知った。今から1年ほど前、僕がその集落を訪ねたときは崩れた棚田の跡も緑に隠れ、とてもどかな山村に見えた。そこで出会った若者が羽山君だった。まるでその土地の人間に見えた彼は、茨城の農業学校の職員で、もうまる1年研修のためこの集落に住んで、棚田を借りて稲を育てながら、住民の農業の手伝いをしていた。彼の爽やかな笑顔からは、とても充実した暮らしをしているのがうかがえた。僕にとって羽山君の笑顔がこの集落の印象を強くし、また来たい場所のひとつとなっていた。それから

も3度ほどこの池谷を訪ねたのだが、羽山君の笑顔はいつでも同じようにかげりがなかった。盆踊りの準備の間に時間を取ってもらい、この土地で2年を過ごした羽山君にあらためて農村での生活をふりかえってもらった。

「初めこの集落に住み始めた頃は、住民からはどんな人間がやってきたのかと様子をつかがわれていたと思います。初めて彼らと打ち解けてきたと感じたのは、それから半年後、この土地の方言でしゃべりかけられ始めたときでした。作物を育てるのに時間がかかるように、ここでは人との関係も時間がかかります」

「今では羽山君への信頼は厚く、住民のほとんどは彼にずつと村にいてほしいと願っている。ところが羽山君の研修は来年の3月で終わり、茨城に戻る予定だ。

「農業は土地と結びついた仕事なので、少なからず土地への愛着は深まっていくんです。自分にとってはまだ一生ここに住むという覚悟はできてないんです。今は、半年程前に兵庫県からこの集落に農業体験をするために越してきた若い家族に立場を引き継ぐ準備をしている。

「この住民は平均年齢70歳を超えています。彼らが代々守り続けてきた、平家の落人が開いたといわれるこの土地で具体的な後継者の話はしつらいです。今できるのは、常に若い人たちがいる状況をつくり出して、信用してもらうことです」

暖かい光を放つやぐらを囲み、のびのびと歌い踊る人々の様子を見ると、ふたつの世代がちやんと向き合い、模索しながらも確実に未来を歩み始めているように見えた。

PROFILE 1971年浜松生まれ。写真家、単行本の刊行や映画製作まで幅広く活躍。9月27日まで山梨@Station Parkで写真ワークショップの成栗寺農展「田間報告」を開催中。

